

【I、序章】

大陸の西端に二つの大国と連なるいくつもの小国があった。

大国の一方は『紫の国』。大陸の西方の海岸線と近隣の島々を取り込んだ、漁業と海路での貿易で大成した皇国。もう一方は『白の国』。北から南まで大陸を分断する峻険な山脈を背に広大な平野を抱く、農業と鉱業を主要産業とし、穀倉地帯として長く続く王国。

二つの国は、何代かに渡って小さな国や領地を取り入れて領土を拡大し続け、国交や貿易を盛んにした結果、互いの存在が開拓や通商路の障壁となってしまう。高い関税の掛け合いに疲弊した商人達の小競り合いや、民草の不平不満は、積もり積もって、ついには国同士の長きに渡る大きな戦争の火種になってしまった。

戦争は、それぞれの王位が今代に移ってからさらに激化、国境を挟んで一進一退の総力戦となる。『白の国』の軍勢は敵陣に対して大河や丘陵地を挟む地形的有利が重なり、貿易港を有する『紫の国』の軍勢の圧倒的な物量をもってしても攻めあぐねている状況であった。

戦況は、「白い魔女」と謳われる程の智謀、『白の国』王女 IA による確実に信頼できる戦術的な導きと、「紫の神殺し」と恐れられる騎士、『紫の国』皇女ゆかりの百人力の怒涛の快進撃とで、さらに揺れ動く。

これは、『紫の国』の第四皇女として生まれながら継承権を完全に放棄、度胸と確かな腕前で先遣騎士団長まで上り詰め、敵に『紫の神殺し』とまで呼ばれ恐れられた、戦勝功労者である武人、ゆかりの、戦いの狭間の出会いと別れを切り取った、儚くも数奇な運命譚である。

【Ⅱ、邂逅】

日が落ちた戦地は、最前線のどんなに激戦区であろうと、名ばかりの『戦時協定』に基づいて、静寂が保たれている。朝日が昇ればまた殺し合いを始める兵士達は、敵味方分け隔てなく皆一様に、束の間の休息をとっていた。

ただ一頭の戦馬だけが、鎧の騎士を乗せて、降り落ちて来そうな巨大な月の煌々とした明かりの下、背の高い木々が黒い影を落とす深い森の中を駆け抜ける。

(まったく……)

馬上の騎士は、兜の中でひとりごちる。

(少しは気を遣ってもらいたいものだな。野郎共の中で、女が一人でどうして身支度が、ましてや天幕すら張っていない露天で湯浴みなど出来よう……)

野営地では、清い水、特に熱い湯などは、とんでもない貴重品だ。どうしても優先的に医療班や調理班に回され、個々に割り当てられる湯水の量など取るに足らず、兵士達は何日も何週間も風呂に入らないことはザラである。馬上の騎士——女だてらに先遣騎士団長であるゆかりとて、待遇はさほど変わらない。

(ここを抜ければ、湖があったはずだ。野営地からも、敵陣からも離れているあそこなら、誰にも邪魔されずに——)

ゆかりは敵兵の返り血に染まった籠手にちらと視線を落とし、ため息を付きながら前に向き直って、手綱にぐっと力を込め直した。

目的の窪地に到着し、手頃な灌木に馬を繋いでから、うまい具合に崖に隠されたような湖に近づく。

ばしゃり。

不自然な水音に、ゆかりは身を固くする。先客がいた。

銀色の髪と細く白く滑らかな四肢を揺蕩わせて湖を泳ぐ姿は、美しい外見と美声で船乗りを誘惑しては船を沈める、古い伝承の美女の姿形をした妖魔を思わせた。

その光景をゆかりはただただ見つめていた。いや、見惚れていたと言うべきか。いつまでも、そうしていたいとおもわせる魅力が、彼女にはあった。

はたして、いつまでそうしていただろうか——

【Ⅲ、接触】

どれだけの時間が過ぎ去っただろうか。

その場ごと永久に凍りついてしまったかのように感じた時の流れは、ひとつの絹を割いたような悲鳴によって溶け出し、再び動き出した。

はっ、と気づいた時には遅かった。

件の娘が、悲鳴を上げたまま口を半開きにして、怯えきった形相でこちらに視線を向け、自分の身体を掻き抱くようにして静止している。

向こうから見れば、ゆかりは血みどろの鎧の戦士で、帯刀もしている。年端のいかぬ村娘が夜半に出会うには、少し酷というものだ。

「いや、すまない。少し水浴びを来たただけなのだ。驚かしてしまって申し訳ない」

その場の言い訳を考える間もなく、とりあえず両手を上げて降参を表し、どうにか取り繕うとしてみたが、あまり効果はなかったようだ。

「わたくしを、殺しにきたの……ですか」

小さな声で少しずつ後ろに下がろうとしているその娘の顔は、怯えた少女のものではなく、凜とした女性に変貌していた。

(警戒されるのは、まあ、……当然だろうな)

ゆかりはこの場をどう収めるか悩んだが、残念ながら、名案といわけではないたった一つのやり方しか浮かばなかった。

「そう警戒めされるな。こんな格好をしているが……私は」

言いながら、剣を、兜を、鎧を、最後に肌着までを脱ぎ捨てる。

村娘は小さく悲鳴を上げ、目を背けた。

ゆかりは意に介さず、歩み寄り、さらに言葉を継ぐ。

「私はこんな格好をしているが女だ。昼間の間中ずっと荒くれ者共とやっている争いを、麗しい女性がいるところでまでするつもりはない。なあ、水浴びぐらいご一緒してもよろしいだろう？」

返事を待たずに、一糸纏わぬ姿で水に入る。夜の少し冷たすぎるくらいの湖の中は、身の内も外も洗われるようで、第四王女という出自や騎士団長という肩書き、戦いの中に生きる運命さえも一様に脱ぎ捨てたかのような、清々しさを感じた。

空を仰いだまますうっと力を抜いて、浮くに任せる。

「いい、月だなあ……」

「……ええ」

ゆかりから女の顔は見えなかったが、同意されたのに気をよくして鼻唄を歌い始める。短い旋律を何度もくり返す、古い詞がついた童歌。

三度目のくり返しに入ったところで、ふと、歌唱が重なった。驚いたゆかりが振り返ると、例の女性が小さな声で古語を口ずさみながら、知っていますよ、とでも言いたげに微笑んだ。湖畔に響く旋律は、くり返し、くり返し、くり返す。

どちらからともなく、ふたりは歌を止め、水から上がり、それぞれ無言で身支度を整えた。

朝が、迫っていた。

「良い夜だった」

「ええ、そうですね」

「有難う。また――」

また、どうしようと言うのだろうか、ゆかりは言葉に詰まった。その間に、女は目礼を寄こして、こちらに背中を向けて森の中へ去っていった。

ゆかりは胸が詰まったような気持ちのまま、待たせていた馬に跨り、走らせた。

朝が来る。戻らなければ。戦いの朝に。

【IV、再開】

「また、会えた」

「……ええ、そのようですね」

息を切らしながら崖を越えてきた、赤く染まった相変わらずに酷い鎧姿を見ても、女は驚かなかった。

ゆかりは適当に脱ぎ散らかしながら彼女に歩み寄るものだから、崖から湖までの間に点々と装備が落ちているような有り様になった。

「前に来た時もこんな月で、だから、会える気がして、そうしたら居ても立ってもいられず……自分でも、おかしいと思うのだが」

抱えるほど大きな満月が、湖面に分身を落とし丸く金色に染めている。

水に入ったゆかりは、まだ少し弾んだ息のまま問う。

「息災であっただろうか」

「ええ。……貴女も」

月を眺めていた女は、ゆかりの姿をちらと盗み見、少し哀しそうな顔をして、月に向き直った。

今日の戦場は殊に激しく、先陣を切ることを役割とするゆかりは、鎧の下まで返り血でべっとりだった。ばしゃばしゃと音を立てながら、ゆかりは暫く水の中で必死で赤を落とそうとする。

「戦争は、……嫌いです」

見兼ねた女が近付き、ゆかりの淡紫の髪を朱に染めんばかりにこびりついた物を洗い流すのを手伝ってやる。

「そうか」

ゆかりは、それ以上言葉を紡げず、髪をいじられている間中、湖の水を両手ですくってはこぼした。月明かりの跳ね返るこんなに清い水でどんなに洗い流しても、この手を染めた赤が消えないような錯覚に目眩を起こすような気分になりながら。

「いつまでも月が落ちず、日が昇らず、朝なんて来なければいいのに、と、願わずにはいられない時があります」

ぼん、と、ゆかりの頭に小さな手のひらが添えられ、洗い終わったことを伝える。

「今がそう。そうすれば、いつまでも――」

はにかんでうつむいた彼女は、純朴な少女のようだった。もしかしたら、見た目やふるまいよりずっと若いかもしれない。

言いたいことはわかった。痛いほどに。ゆかりも同じ事を思っていたのだから。戦いが終われば、故郷に、城に、帰らなければならない。こうして会うことは、叶わないだろう。

この戦いが終わらなければいつまでも、こうしていられるだろうに。

――願わくば、主よ。いくさばの神よ。この戦いがもうしばらく続きますように……

そう願った。

そう願ってしまったのだ。

【V、逢瀬】

戦況は『紫の国』が幾らか押しているようではあったが、決定打はなく、依然として厳しいものであった。

騎士としての仕事は減らず、むしろ増える一方で忙しくあったが、月明かりが出るたびにゆかりは馬を駆って、湖を訪れた。その度に、銀髪の女は全てわかって待っているかのように、そこにいた。

多くは語らないたわいない会話と、その空間自体を、ゆかりは愛するようになっていた。

何度目かの逢瀬で、珍しく銀髪の君の方から話題を振ってきた。

「ひとつ、訊きたいのですが」

「なんだろう？ 武人故に、難しいことはわからぬが、私に答えられるものならばなんなりと」

真剣な瞳でじいっと見つめられるので、どんな難問を突き付けられるのかとハラハラしたが、飛び出たのはむしろ拍子抜けしすぎて驚くような可愛らしい問いだった。

「海とは、どのようなものですか？」

「見たことがない？」

「ええ、私が識るのは、山脈の切り通しの街道よりも標高の高いところからやっ見える地平線の先の小さなきらめきと、書物の中でだけ。広く、大きく、深く、水が塩辛いと、読みました」

「ああ、そうともさ。この湖の、何百、何千、何万倍と広大で、誰もその底がどこにあるのか知らぬほど深く、数え切れない程の様々な魚や動物がいて、遠い遠い陸地に繋がっている。途方もなく果てしない水の世界さ」

ゆかりが両手を振り上げて熱弁を振るう。

岸壁に並ぶ船舶の白帆の壮観なこと、船乗り達の腕っ節のなんと逞しいこと、毎朝漁港は競りで大賑わいで、貿易商人や両替商で棧橋はいつだってお祭り騒ぎなこと。それから――。

それは、城から見降ろせる、実際にゆかりが幼い時から見てきた、紫の国の西端の港町の光景である。

「見せてあげたいよ」

「ええ、見てみたいです。あなたと一緒に」

ゆかりは驚き、赤面し、照れ隠しのように水の中に顔を半分まで沈めた。

今日の彼女は、よく喋った。

「わたくし、たまに夢想するんです。二つの国が何も競わず、争わず、共存共栄している世界を。許されれば誰でもいくらかでも国境を超えることができ、明るい陽射しの下で、好きなものを見て、好きなものを食べて、好きな人を愛することができる世界」

ゆかりは、ぶくぶくと口の周りの水をうるさく泡だてながら笑った。

「はは、君は、恐らくまつりごとには向かないが、吟遊詩人か幻想譚を書く作家には、向いているやもしれないね」

「……………」

彼女は微笑むだけで何も言わない。

「そうだね、そんな世界があったら……どうしようか」

長く戦いの中で生きたゆかりには、戦いがすなわち生きる場所であった彼女には、想像もつかなかった。

――願わくば、主よ。もう少し、もう少しだけ、この争いが長引きますように。

変わらず願うことしかできなかった。

【VI、運命】

夜が来た。真昼の夜が。

それは酷く突然の事で、正午前のほぼほぼ真上にあったはずの太陽にどんな雲より厚い影がかかり、あっという間に飲み込んで、地平は新月の夜より深い闇に包まれた。戦地でも、それは同じ事。

『白の国』の陣営は混乱した。明るさに慣れた兵士達の目は何も映さず、戦地で不必要なはずの明かりが手元にあるわけもなく、まるでそれらを予見していたかのような『紫の国』の兵士達の迅速な行動を、見ることすら叶わずに没していた。

世界が光を取り戻した時、長きに渡る大戦の勝敗は決していた。たった半刻ほどの出来事であった。

あちこちから勝鬨があがる。

『我が軍は、月と共に在り！ 勝利と共に在り！ 紫の国の勝利である！！』

「はは、夜の月が昼の太陽を喰らうなんて、俄には信じられなかったが……信じて良かった。国の天文学者らには、功労賞だな」

ゆかりは、一度兜を外して、燦々と降りしきる日の光を仰いで目を細めた。

日蝕。それが、『紫の国』の作戦で、切り札であった。

ガシャガシャと鎖帷子と鉄帽子だけの軽装兵が、ゆかりに走り寄る。

「騎士長殿！ 伝令！ 第二、第三部隊による城下町の制圧が完了しました。第一部隊、及び騎士団により城内の無力化と王女の搜索を継続中」

「ご苦労。私もすぐにそちらに向かう」

ゆかりは気持ちを切り換えて兜をかぶりなおし、愛馬に跨がって、戦火の爪痕が真新しくも痛々しい初めて見る異国の城下町を駆けた。

「騎士長殿！ 王女が見つかりました」

「今行く」

散々手こずらせた敵国の軍師である。『白の魔女』——どれほど面妖な人間であるか。ゆかりは戦場では珍しく緊張した面持ちで、腰に提げた数多の敵を屠り血を吸った剣の柄に触れて深呼吸をした。

城の最奥、酷く荒らされた玉座の間にゆかりが足を踏み入れると、間もなく、荒縄で縛りあげられ、ずた袋を被せられた、聖衣の人間が引きずり出される。

ゆかりはゆっくり剣を引き抜き、その首に狙いをつける。別の騎士が乱暴に、王女の頭にかけてられたボロ布を取り払った。

「わたくしを、殺しに来たのですね」

ゆかりは、はっと息を飲んだ。

『白の魔女』の凜と響くその声、剣を向けられてなおどこまでも落ち着いたその姿、なによりこぼれ落ちた銀髪の煌めき。見間違えうわけもない。

湖のほとりでの出会いや出来事が、短い旋律や些細な会話が、自分に触れた細い指が、走馬灯のように頭の中を一瞬で

流れる。

ただ、あの時、あの場所で。一分でも一秒でも長く一緒にいられば、それでよかった。

きっと神はこの自分勝手な願いを望んでしまった自分に天罰を下したのだろう。

――主よ。私には人を愛する資格など、ないのでしょようか。

――主よ。懺悔します。この戦いで数十、いや数百、それ以上でしょう。とても数えきれないほどの人を殺めてきました。虫けらを払い潰すかのように。

「いいのですよ。私はわかっていました。出会った時、あなたの鎧に月の紋を見つけた時から。そう、それでも、一目見た時から、私はあなたを愛してしまったのです。王女ではなく、一人の人間として愛する人と一緒に過ごした時間。もう死んでも構わないと思った。ごめんなさい。ずっと嘘をついていて。私は一分一秒でもあなたのそばにいたかった」

――主よ。何故、このような試練を与え給うたのでしょうか。

――主よ。戦場の神よ。私のこれまでの行いは、間違っていたのでしょうか。

そして、

彼女は一切の抵抗や命乞いをする事なく、

私の目の前で、

あの綺麗な白銀の髪を紅く染めていった。

私の目の前で、

細く小さな肢体を震わせすぐに冷たくなった。

私の、目の前で……。

――願わくば、主よ。私のただひとつの望みを叶えてくださるならば。

――願わくば、主よ。私を殺してください。

その後の事は、よく覚えていない。

どうやって国に戻ったのか、どうやって生きていたのか。

国はもちろん大騒ぎで、しかし、どこにも彼女はいないのだと思うと、何もかもどうでもいいような気がした。

彼女に見せたかった海がそこにあり続けるこの国は、私にとって辛すぎる。

何度か本気で死んでやろうとした気がするのだが、五体満足でここに存在するということは、どうやらそのたびに近しい者達に止められたようだ。

意味を持って生きることも、意味を抱えて死ぬことも叶わず、今も、ただ悠久とも思えるこの時間という苦痛を、生きもせず死にもせず、味わい続けている。

—願わくば、主よ。どうか、私の御霊を、彼女の元へ。